

春の夢

ボクの戦後七〇年談話(疎開物語)

権名利(化工会)

私は、アルバムの一葉の写真に目を止めた。小学校二年生のクラスの集合写真だ。四人ほどのグループで、坊主頭の男の子が半数、おかつばの女の子が残りの半数だ。真ん中に髯を生やした校長先生と並んで、中村先生がいた。黒のジャケットとスカート、白いブラウス姿の先生は、少し微笑みを浮かべ、学校出たての教師らしい若さにあふれていた。これが、私に七〇年前の過去を想い出させてくれた。

(一)

昭和一八年、ボクは神戸の成徳国民学校四年生になっていた。四月に赴任してきた絵画の立花先生は、学校出たてらしくはつらつとしていた。いつも画家が着る上張りのようなものを着けているので目立たないが、背は高いが痩せていた。口悪い連中は、『丙種合格』と呼んでいた。髪はおかっぱみたいで、坊主頭しか見たことなかったボクには不思議な人に見えた。

親友の西村君は絵がうまかったので、絵画教室によく出入りしていた。それにつられて絵画教室に入るようになったのが、立花先生と親しくなるきっかけだった。

先生は、ボクたちを子ども扱いにすることなく、話し相手になる兄貴のようだった。話好きだった。だから、ボクたちはなんでも話した。

例えば、ボクは「君は大きくなったなら何になるのだ？」と、聞かれると当然のように、「海軍軍人になりたい、海軍兵学校に行きたいです」と応える。

「なぜ海軍？」と聞かれると、ボクは得意げに、

「父は、応召されて、空母に乗っています」と応える。

「短剣など差して格好いいもの……」と、家庭の事情が話される。

親友の西村君も、同様に父親は早く病死し、美容師である母親が生計を支えているのを話していた。

西村君は、人懐っこい目を細め、とても温和な話し方をした。鼻が悪いのか時々、「クンクン」と、鼻を鳴らし細かい少したれ目をボクに向けると、照れるのか微笑むのだった。

それに彼は、戦争関連の本しかない当時、珍しく明智小五郎シリーズの『怪人二十面相』などを持っていた。彼と仲良くなったきっかけは、そんなところにあったのかもしれない。

ボクたちは、放課後よく二人で校舎の一番端の絵画教室に、立花先生を訪れた。

ある時、教室に入ると彼は、熱心に椅子に座る中村先生をデッサンしていた。少し右よりの視点から描いている。中村先生は少し照れた表情を見せると、ボクたちに小さく手を振り微笑んだ。その後、何度も見て見慣れた風景になった。

中村先生は、二年生の時の担任で、音大卒業後すぐに教師になっていた。いつも優しい目で「なーに……」と問いかけるように笑んだ。女学生気分のまま、ボクたちと調子を合

わせてよく遊んでくれた。だから、しばしば先生の帰りを裏門で待ち受けていた。

立花先生は、デッサンを続けながら、「もう少し待ってくれ。すぐ終わるから」と云った。イーゼルの絵を覗くと、太い鉛筆で書かれた輪郭は、すでにほぼ出来上がっていた。

立花先生は相生の出身で、両親とも教師の家庭で、学校の近くに下宿していた。ボクたちは西村君とよく下宿を訪れ、なんとはなく話し込んでいた。八畳程度の部屋にイーゼルがあり、すわり机がある。本棚にはぎっしりと本が詰まっていた。難しい本ばかりだったが、なぜか『愛と認識との出発』と云う本があったのを覚えている。多分なにも分からず『愛』の言葉に惹かれたのだろう。

スケッチブックを覗くと、ボクたち二人が描かれたのもあったが、中村先生の姿は正面、横顔など数枚のデッサンがあった。

この手狭な部屋には手回しの蓄音器もあり、ボクたちに聞かせてくれた。「これはクラシックと云う音楽だが……」と、解説をしてくれる。

最初に好きになったのは『軽騎兵序曲』で、先生の解説によると、遠くから軽騎兵が近づいて来る様子を描いたものだろう。何しろ行進曲で勇ましく感じるもので、いつもこれをせがんだ。次に好きになったのはハイドンの『おもちゃの交響曲』だった。なにかゼンマイ仕掛けのおもちゃが動いているのを思わせる。これが、ボクのクラシックへの入口だった。

ある時ボクは、好奇心から「ダダダダーン」と、云う曲ありますかと訊ねると、先生はボクを見つめながら笑うと、

「ベートーベンの五番運命だね。聞かせてあげよう」と、レコードを取り出し、柔らかなうな布でレコードを拭くと蓄音機に乗せた。

黙って聴いた。よくわからなかったが、初めの部分は云われている通りに聴こえた。終えると先生は、

「これは、四楽章からなるソナタ形式と云われるものだが、ソナタ形式とは『起承転結』——国語で習った？——ように「ダダダダーン」と初めがあり、中に展開部と云う説明するような部分があり、終わりがある。いやー難しいことを言ってしまったかな。クラシックを理解するためには、どこか好きなメロディーを見つけないとだ。そして、そこを聴こうと思って聴くと、自然に全体がわかってくる。初めの楽章はテンパニー、太鼓だが「ダダダダーン」と打ち鳴らされ、これが『運命が戸をたたく』と云われている。第一楽章は早いけど、それに対応した第二楽章はゆっくりしている。なにか水の流れのように自然で落ち着く。私はこの第二楽章アンダンテが好きなのだよ。君たちも大きくなったら聴いてくれ、好きになってクラシックファンになってくれたら嬉しいよ」

ボクは、よく理解できなかったが、そこになにか高尚なものがあるような気がした。

(二)

昭和一八年にもなると、戦いに初めの勢いはなく、アッツ島の玉砕、ガダルカナルの撤退など戦局は不利になり、本土が空襲にさらされる危険が出てきた。そのため『学童疎開』が提案され、①集団疎開 ②縁故疎開 ③残留の三つの選択肢が示され、ボクは『集団疎開』、西村君は残留となった。

二学期が始まって間もなく、絵画教室に行くと言花先生が、「君たちも疎開などでバラバラになる。私も多分近いうちに赤紙が来るだろう。どうだろう、送別のハイキングをしないか？」と、問いかけてきた。ボクたちは「中村先生も一緒に……」と云い、中村先生も一緒に四人で行くことになった。

秋晴れの気持ちの良い日曜日、三宮駅に四人は集合した。ボクたちは戦闘帽をかぶっていたが立花先生は白い帽子をかぶっていた。男性は、皆戦闘帽なのと思った。バスに乗ったのは覚えているものの、どこで降りたか、どのような道をたどったか記憶になかった。バスを降りてから、傾斜のある斜面や石段を、ボクたちは戦争ごっこなどをしながら、およそ二時間歩いただろうか。到着した場所は、広々とした松に囲まれた広場で、池もあった。国旗掲揚台の前で、在郷軍人と思われる一団が敬礼していた。

ボクたちは木陰の草むらに座ると、中村先生が用意してくれたお稲荷さんや海苔巻で昼食をとった。ボクたち二人は遊びまわっていたが、先生たちは二人ともなにか話していたようだった。遊び疲れて戻ると、立花先生がああアンダンテのメロディーを口ずさみながら、「歌でも歌おう……」と云って、ボクたちを促した。ボクたちは勇ましく軍歌を歌った。多分『加藤隼戦闘隊』だったと思う。

中村先生も歌った。ソプラノの綺麗な声だった。先生が歌った曲がクラシックであるとは思ったが、何かはわからなかった。ただ、静な哀愁に満ちた曲だった。

出征する立花先生を送る歌としては、活気がなくそぐわぬい感じで、非国民とさえ云われそうな気がして怖かった。

しかし、立花先生は目を閉じて聴いていて、終わると拍手をした。ボクたちも分からなかったが拍手をした。歌い終わった中村先生は、両手を草むらにつき顔を伏せていたが、肩が小刻みに揺れていた。しばらくして目を上げると、微笑えみ涙ぐんだ目を拭いた。

その年の終わりに、立花先生は応召され、大阪の師団に入隊した。

(三)

ボクたちの集団疎開先は、いろいろな場所が噂されたが最終的に淡路島の志筑と決まった時、ボクたちはすでに五年生になっていた。

昭和一九年五月の末、出発することになった。移動する生徒五年生、四年生各々三〇人ぐらいが校庭に集まり、『一億一心火玉だ』との幟を背に、校長先生の訓示を受けた後、六甲道駅から電車に乗り神戸駅で降りた。丁度、一番離れたホームに軍隊の移動のため仕立てられたと思われる特別列車が停車していた。

誰かが叫んだ。「立花先生だ！」と、デッキにいる将校姿の兵士を指さすと「オーイ」と呼びかけ手を振った。皆これにつられて手を振ると、彼も分かったのか手を振って応えた。ボクは、立花先生かどうかわからなかったが手を振った。

駅を出ると戦いの神様と云われている楠木神社に参拝し、軍歌を歌いながら兵庫港に赴き船に乗った。

志筑の宿舎は、海洋少年団の宿舎だった。海岸に建つこの建物は、二階建てで各々四〇畳はあるうか、隣には引率の先生と寮母さんが泊まる建物があった。布団をひくと一人のスペースは一畳程度だった。

集団生活は朝食後、前の砂浜に整列し、各々の班長の点呼で始まり、志筑の小学校の一室を借りての授業となる。何を学んだか覚えがないが、概ね午前中で終わりだった。

午後は、前の砂浜で相撲をしたり、真夏は先生の監視の下で泳いだりしていた。無性に腹が減って食事の時間が待ち遠しかった。そのうち家が恋しくなって仲間と帰る計画を立てたが、先に逃げ出したやつが、降りる港で捕まり連れ戻されるのを見て、脱走計画は不可能なのを知った。

九月だったろうか、なんの前触れもなく母が現れた。先生が縁故疎開するので、母が迎えに来た旨ボクに告げた。嬉しかった。しかし、皆帰りたい気持ちでいるときに、敵前逃亡するように躊躇われた。「帰りたくない」と泣いた。

先生に、縁故疎開も立派な疎開だと説得され、先生が皆に寄せ書きをして励まそうといわれ、皆が書いてくれた。中に『今度会うときは靖国神社だね』と云うのがあったが、その時は何の違和感もなかったが、今考えると『教育は怖いものだ』と思った。

神戸に戻ると、妹たち二人は、既に疎開していた。軍が交通を支配していたので一般の切符は申請して待つようになる。一か月程かかったと思う、無事、母の実家茨城県の水海道——現在の常総市——に疎開したのは一〇月の終わりだった。

転校生として、ボクの関西弁がからかいの対象となった。それに半ズボン姿にランドセルは生意気だと云う。そう云う彼達は、綿入れのちゃんちゃんこに、教科書を入れた風呂敷包みを腰に巻いていた。毎日の宿題は堆肥の草刈りで、その刈った重さがグラフに書きこまれ教室に貼ってあった。鎌の使い方もよく知らず、堆肥になりやすい草も分からないボクの草刈りのグラフは、はじめなものだった。これで評価されるのかと思うと暗い気持ちになった。授業らしい授業もなかったが、妙に皆算盤が達者だった。

松根油を採るのも日課だった。先ず、松の木にV字型の切れ込みを入れる。V字の頂点に缶をぶら下げると一日一〇〇gぐらいの脂みたいなのが取れる。なんでもこれを精製すると航空燃料になるのだそうだ。

昭和四五年三月一〇日の東京大空襲は、凡そ一〇〇kmは離れているこの場所からも、赤々と燃えているのがわかり、翌朝には焼けた紙屑が庭一面を覆っていた。

八月一五日は晴天だった。放送は自宅で聞いた。よくわからなかったが「負けたらしい」と母が言った。早速、学校に行き担任に「今後どうなるのですか？」と問うたが、応えはなかった。ただ、ボクはもう誰のためにも生きない、自分のためにだけ生きようと思った。

翌年昭和二一年ボクは旧制最後の水海道中学に入学した。水海道は教育熱心な街らしく男女両方の中学があり、付近の中心的な街らしかった。そのため、中学がない付近の村や町から一、二時間かけて自転車などで通学する人が多かった。

鬼怒川と小貝川に挟まれた街は、かつては江戸と結ぶ船便の要所であったようだ。

さすがに、終戦後は草刈りもなく、中学ではからかわれることもなかった。

なんととはなしにバスケット部に入った。教室に畳をひいた合宿も経験した。四、五年生の先輩たちはニキビ面で大人に見えて怖かったが、なにかとよく面倒をみてくれた。

終戦後、色々なものが変わったが、ラジオ放送もその一つで『放送の目的は娯楽』を掲げ全盛時代を迎える。『話の泉』や『鐘のなる丘』などの放送劇が盛だった。

空襲下、難を逃れて数寄屋橋で互いに知り合い、助け合った真知子と春樹が戦後の再会を約す物語が、すれ違いに終わる菊田一夫の『君の名は』は、その放送時間には、——夜の八時〜九時——銭湯の女湯がガラガラになると噂されたほどだった。

また、レコードなど買える余裕のない時代、ラジオ放送が唯一のクラシックを聴く方法だった。日曜日の八時からの堀内敬三の解説する『音楽の泉』『土曜コンサート』などは、ボクのいつも聴く楽しみの番組だった。ひどい音だったのだろうと思う。

二年生になる時、新制中学になり卒業のころには、立花先生が好きだった『ペーターベンの五番の第二楽章』のトランペットが奏でるアンダンテが理解できるようになった。

更に幸運なことは、学校近くの叔父さんのところに下宿しているP君と友達になったことだった。

彼の叔父さんはレコードの収集家らしく、中でも自慢はゲルハルト・フィッシュが歌うシューベルトの『冬の旅』のアルバムだった。恋人と別れ人を避け、孤独な冬の旅に出る若者を描いた二四曲から成るリードだが、——ドイツ語の韻が美しい——中でもボクが好きなのは、わずかな希望さえ持てない状況の中で、美しい花が咲く春の夢を見るが、目覚めると厳しい現実を引き戻される。この春の淡い夢にかなわぬ希望を託す心情を歌った『二・春の夢』と、決して来ることのない手紙を、郵便馬車が来るたびに、もしやと期待する心境を語った『三・郵便馬車』だった。

授業では、療養のため故郷に戻っておられたT先生担当の幾何が、ボクは好きだった。そのためか、何となく数学・物理など理系の教科に興味を持った。

T先生は、千葉大の工芸意匠科の教授で、ボクたちを自宅にまねいて金曜会なる雑談の場を作ってくれた。集まったボクたちは、先生の専門分野の『アトリエ』など絵画雑誌や、アサヒグラフなどを勝手に読んだ。生意気にもピカソやマチスを語るやつがいるかと思うと、アサヒグラフの高校野球を見る野球に熱心な奴もいた。この会は本がまだ少ない当時——リーダー・ス・ダイジェストだけは綺麗な装丁で出回っていた——貴重な場だった。

疎開の者は、大方高校になるとき戻ってしまったが、ボクはまだだった。

T先生は大学に戻るときボクに、ここの授業だけでは君の志望校は無理だと云われ、自習するようにと、『代数のあたま』の参考書をボクに渡した。これがボクの受験勉強を始めるきっかけになった。

高校三年になる時、ようやく横浜に移転し翠嵐高校に転校した。

横浜に来て初めて封切り映画を見た。中に『カーネギーホール』と云う映画があった。タイトルカーネギーホールが現れると、ペーターベンの五番の第二楽章アンダンテが流れる。また、各所でこのメロディーが流れた。

冒頭、ホールのこけら落には、チャイコフスキー扮する俳優が、自作のピアノ協奏曲第1を指揮することで始まる。物語は、ホールの掃除婦が息子の音楽教育のため、演奏を聴かせるという他愛ないものだが、著名な演奏家の来日などない当時、——当然DVDの映像などがない——レコードでは知っているハイフェッツ、ストコフスキー、ワルターなど著名な演奏家を見られる貴重な映画だった。この映画で、このアンダンテは、ボクの中に定着しいつも立花先生を思いださせてくれた。

時々、横浜駅で『特急つばめ』など見ると神戸が懐かしかった。飛んでいきたかった。

母がどこから聞いたのか「西村さんの家は焼けなかった」と、伝えてくれ彼との文通が始まり、大学に入ったら必ず神戸に行こうと思った。浪人はしたものの昭和二九年無事志望校に入学した。

(四)

大学に入学した最初の夏休み、神戸行きを実行した。丁度、シアトル・バンクーバ航路の氷川丸が、横浜から神戸まで回送されるのに乗船した。——この時期、横浜→神戸の乗船が一般に公開されていた——

午前一〇時に出港した氷川丸は、翌朝早々、紀伊半島の先端を回ると一〇時頃には淡路島が真横に見える位置に来ていた。ボクは望遠鏡を借りると、あの志筑の宿舎を見つけようと眺め続けたがよくわからなかった。

神戸に入港すると、白い開襟シャツの西村君がタラップをあがってきた。

二人とも言葉もなく無言で手を握り合った。

彼の家を本拠地として戦後の関西見物となった。

先ず、かつて住んでいたN町に行ってみた。一面焼け野原になったらしく、バラックとは云わないまでも、粗末な家が建っていて、住んでいた当時の面影は見られなかった。

ただ、電信柱に張り付けられていた住所表示が、N町×丁目×番地と明らかに以前住んでいた場所であることを示していた。

六甲山に上った。頂上のカンツリーハウスは昔のままだった。京都に行き南禅寺から銀閣寺まで歩き、祇園祭も見た。宝塚では、少女歌劇福田蘭童の『笛吹童子』を見た。華麗な衣装で舞う彼女たちからあの疎開時代を思い出すのは出来なかった。

西村君が、ボクのために連絡可能な仲間を集めてくれて、ビールを飲んだ。既に、務めている人もいた。誰かが三月一七日の大空襲を語ると、丁度そのころ志筑の集団疎開の連中が、淡路島は危ないと次の場所に移るために戻っていたので、皆バラバラになってしまったと話していた。だんだんアルコールが効いてきたのか、

「おい、中村先生を覚えているか。音大出たての先生。若くて綺麗な先生だったよな」との声に、「俺の初恋の人だ」との声が上がると、「俺も、俺も……」と、会は盛り上がった。

家に戻った西村君は、「中村先生の家は、焼夷弾の直撃をうけたみたいで、今でも空地のままだよ。どうされたか……」との、話しになったが確かめようがなかった。ボクが

「あのハイキングの場所はどこだったのだろう。行ってみようよ」と云うと、彼も賛成した。

しかし、どこかは覚えていなかった。歌など歌った松に囲まれた広場と、出発点が三宮駅でバスに乗ったのは覚えている。彼は再度山公園（ふたたびこうえん）ではないかと地図を拡げた。

多分、諏訪神社から大師道と称される、谷川に沿った道を歩いたに違いないとの結論になり、再度山公園を目指すことになった。

当日は、三宮からバスで諏訪神社まで行き歩き出した。バス通りでもある舗装道路は、夏の陽を浴びて照り返しで暑かった。二〇分も歩くと、神戸の街が見下ろせる場所に来た。左に谷間に降りる道がある。降りると幅二〜三メートル幅の水が流れる谷間に出るが、周り

は樹に覆われ涼しかった。しかし、これが以前、通った道かどうかは分からなかった。谷川沿いの道の柵は、手を下された様子もなくとどころ痛んでいた。谷川を何度か渡った。再度山公園はかなり標高があるので、坂道や石段は結構きつかった。道は、谷の流れから離れたり、再び谷沿いになるのを繰り返していた。一時間ほど歩いただろうか、小さな池にたどり着いた。地図を見ると『狸々池』と記されていた。小休止を取る。

流れから大きくそれ急な斜面を登ると公園に出た。池があった。『修法寺池』と云うそう。池に沿った道を歩くと、朽ち果てたボートが捨てられていた。雨水だろうか中に水がたまっていた。池を離れ、雑木林を抜けると、やがて松に囲まれた広場に出た。

この広場の風景は、間違いなく以前ハイキングに来た場所に違いなかった。当時は、国旗掲揚台に日の丸が掲げられていたが、掲揚台だけが薄汚れて立っていた。今では数組の家族連れが子供などを遊ばしていた。戦時中、戦闘帽姿の人々しか見かけなかった当時とは違った風景だった。終戦後およそ一〇年、懐かしかった。木陰の草むらに腰を下ろした。ここは、標高が四〇〇メートルあるらしく風が涼しい。弁当の握り飯を食べた。

草の上にあおむけになり、黙って空を見上げると、先生たちが二人で話していた光景が浮かんできた。二人ともお元気なのだろうか。微笑みを浮かべた中村先生が浮かんでくる。立花先生を思い浮かべると、あのアンダンテのメロディーが聴こえてきた。松林を抜けた風が、汗ばんだ肌に心地よい。西村君も同じように何か思いに沈んでいた。しばらく、空白の時間が続く。ボクは、再び立花先生の言葉を思い出しながら西村君に、

「ベートーベンがわかるようになったよ。あのアンダンテを聴くと立花先生を思い出す。先生が、『水の流れるように……』と云われた言葉を……。水が高いところから低いところに流れるように、自然な生き方を望んでおられたのだね。ごく平穏な生活を。でも、出征された先生どうされただろうか……」

「……」

「戦争でもなかったら、中村先生と結婚されていたのだろうか」と、西村君に顔を向けると、彼はボクの言葉にうなずきながら、

「ね、中村先生が歌った曲わかる？」と、ボクを見つめると黙った。なんとなく静かな曲だったイメージは思い出したもののわからなかった。

ボクが首を振ると、彼はメロディーを口ずさむと、

「冬の旅の『春の夢』さ。最近ようやく分かったのだ、あの曲が……」と、ボクを見つめるとメロディーを口ずさんだ。

母はどこから得たのか、中村先生は結婚して金沢に在るとの消息を伝えてくれたが、立花先生の消息はついにわからなかった。

* * *

私は今、フィシャー・デスカウの歌う『冬の旅』を聴いていた。

五月に咲き満つるような

とりどりの花の夢を見た

朗らかに小鳥がさえずる

緑の牧場の夢を見た

……

しかし雄鶏がなくなると

私の心は夢から覚めてしまった

いま私はここにたった一人で座り

あの夢を思い出している

わたしはふたたび目を閉じたが

心はまだ温かく脈打っている

窓の木の葉はいつ緑になるのか

いつ、わたしは恋人をうでに抱けるのだろうか

(二…春の夢 木川田誠訳)

今ならわかる、『春の夢』を歌った先生が……。

淡い春の夢に、一縷の希望を託さざるを得なかった中村先生の心情が……。

(2015-11-2 原稿用紙 29枚)